

「い形容詞＋ナイ」の韻律的特徴

—アクセント・イントネーション・持続時間の側面から—

湧田 美穂

キーワード

い形容詞・ナイ・韻律・表現意図

1. はじめに

韻律のパターンは「疑問なら上昇調」などのように普遍的、短絡的に捉えられがちであるが、実際には言語間で違いがある。非母語話者の日本語習得過程で見られる韻律の母語干渉については、これまでも数多く研究されてきている。(鮎沢 1991、1993b、1993c、杉藤 1990 他) 母語と日本語との韻律の違いが影響し、学習者が母語話者と接触する際にコミュニケーション上の問題が生じる場合も少なくない。

2. 問題提起

このような誤解が生じやすい表現の一つに、「ナイ」で終わる文(以下、「ナイ文」)が挙げられる。例えば、形式は同じ「カワイクナイ。」という発話でも、「かわいいとは思いません。」と否定を表明する意図(以下「否定表明」)で発話する時と、「かわいいと思いませんか?」と同意を求める意図(以下「同意求め」)で発話する時とでは話者がまったく反対の意見を持っていることになる。しかし、これらは言語形式が同じで、韻律的要素だけによって区別されることから、学習者の混同を招きやすいようである。このような韻律的実現の違いについて音声学的に明らかにした研究はまだ数が少ない。「ナイ文」の韻律に関する先行研究には福岡(1999)があるが、福岡が取り上げた「動詞＋ナイ」以外の「ナイ文」についてはまだ研究がなされていない状況である。そこで本研究では「形容詞＋ナイ」を研究対象として取り上げることにした。今後日本語教育研究として学習者の問題へ発展することを視野に入れ、まず母語話者による発話の韻律的特徴の実態について整理しておく必要があると考え、本研究に着手した。

3. 実験概要

3.1 目的

本実験の目的は、「い形容詞＋ナイ」の発話が「否定表明」・「同意求め」の表現意図を持って発話として実現される際の、韻律的特徴を明らかにすることである。

3.2 協力者

調査協力者は20代の日本語母語話者16名（男8・女8名）で、全て東京語話者¹に限定した。以下表3.1に、調査協力者の詳細を記す。

3.3 方法²

調査協力者には、2人の親しい友達同士が話している場面を示した絵を含むスクリプト（資料1参照）を見せ、場面と会話の状況、および話者の表現意図を十分に理解してもらった。次に登場人物のうち調査対象発話を含む台詞部分を発話してもらった。相手役は筆者が担当した。この発話を、音声資料としてDAT録音機およびコンデンサーマイクを用いて録音した³。会話は、二回ずつ録音した。実験に使用した対象発話は、「アマクナイ（甘くない）」・「ヨクナイ（良くない）」・「オモシロクナイ（面白くない）」に「否定表明」と「同意求め」の各表現意図を設定したものである。

3.4 分析項目

音声資料を基に各発話について表現意図ごとに分析を行い、それぞれの特徴を記述する。まとめとして、「同意求め」と「否定表明」との間に見られる韻律的特徴の違いを見る。分析に際し1)アクセント、2)イントネーション、3)持続時間の各項目に着目する。資料の分析は、まず聴覚印象により行い、その後、コンピュータに取り込み、音声分析ソフト⁴によりピッチ曲線を抽出し、視覚的に確認する方法をとっている。

1) アクセント

NHK日本語発音アクセント辞典（2002）に規定されているアクセントの法則（以下、アクセントの法則）⁵を参考に、対象発話として平板型形容詞の代表として2拍語の「アマイ（甘い）」、起伏型の中でも頭高型形容詞の代表として2拍語の「イイ（良い）」、中高型

形容詞の代表として5拍語（4拍以上語）の「オモシロイ（面白い）」の「ナイ文」をそれぞれ選出した。

これらの対象発話は、上記のアクセント法則によれば、アクセント型は、「アマクー」は[0型]、「ヨクー」は[-2型]、「オモシロクー」は、「シ」から「ロ」にかけて下がる[-2型]か、あるいは「ロ」から「ク」にかけて下がる[-3型]になることが予測される。（表3.2）

表3.2 対象発話の語幹アクセント型仮説

対象発話	アマクナイ	ヨクナイ	オモシロクナイ
予想される アクセント型	アマクーナイ	ヨクーナイ	オモシロクーナイ オモシロクーナイ
	0型	-2型	-2型・-3型

音声資料を基に、以上の仮説を検証する。「オモシロクナイ」に関しては、協力者の間でも上記のようなゆれが見られるかどうか、確認の必要がある。また、昨今の東京の形容詞アクセントにおいて指摘されている、「平板型（「赤い」など）と、起伏型（「白い」など）の区別がなくなりつつある現象」（井上1997）についても注目する。さらに、上記の語幹アクセントの考察に加え、「い形容詞+ナイ」を語幹部分と「ナイ」の部分の2単位と捉え、「ナイ」のアクセント核の動向についても分析する。

なお、以後平板型のものを[0型]、起伏型のものはアクセント核がある位置が語幹の最終拍から数え、1拍目にあるものは[-1型]、2拍目にあるものは[-2型]、3拍目にあるものは[-3型]と略称を用いる。

2) イントネーション

「否定表明」と「同意求め」は前者が肯定文、後者が疑問文であるため、文末「ナ」から「イ」にかけてのイントネーションパターンが両者を区別する最も大きな要素になると思われる。

日本語の疑問文全般の韻律的特徴については鮎沢（1991、1992、1993a）に詳しい。鮎沢によれば、文末に見られるピッチの上昇は、3拍語以上の平板・尾高型アクセントのある語の文末ではピッチの上昇幅が狭いものの、それ以外の語に関しては1オクターブ⁶前後、またはそれ以上のピッチの上昇が見られることが報告されており、最終拍1拍での1オクターブに近い上昇が、日本語疑問文に特徴的な韻律であるとしている。

しかし一方で、杉藤（1990）は、「動詞+ナイ」の反問⁷および勧誘における韻律的特徴について考察し、勧誘においてピッチの上昇、下降の程度がわずかである現象を観察している。本研究でも否定疑問文である「同意求め」表現を扱うが、この表現に見られる韻律的特徴は、杉藤で観察されたように、疑問文であっても必ずしもピッチの上昇幅が十分に見られるものばかりではないであろうという仮説の下、実験による検証を行うことにした。

また、本章の冒頭でも述べた、発話文全体的に平らに上昇していく新形のイントネーションに、どのようなピッチパターンが観察されるのかについても注目する。

3) 持続時間⁸

文末「ナイ」に関しては、イントネーションと合わせて持続時間も重要な分析材料になると思われる。本研究では、発話全体の持続時間に対する「ナイ」の持続時間の割合を調べ、持続時間が設定表現意図を区別する要素となっているかどうかについて見る。仮説として、「同意求め」の発話が上昇調を伴うために持続時間も長くなる傾向が見られると予測し、これについて検証を行う。

4. 実験結果と分析

4.1 アクセント

4.1.1 「否定表明」

前述のように、「形容詞+ナイ」のアクセントを、語幹アクセントと「ナイ」のアクセントの2単位構成と考え、語幹部分と「ナイ」の部分とに分けて論述を進めていくことにする。なお、「ナイ」のアクセントは「ナ」にアクセント核がある[1型]が基本である。

「否定表明」の場合、「ナイ」のアクセントは全て「ナ」にアクセント核がある[1型]であった。同じ[1型]のアクセントでも、「ナイ」の部分のイントネーションパターンは様々だが、この点に関しては後のイントネーションの項で触れることにする。

語幹部分のアクセントパターンを見ると、若干のゆれがみられる。以下、各表現について見ていく。平板型形容詞「アマイ」の連用形「アマク-」は、アクセントの法則によると、[0型]である。音声資料を見ると、この法則通り[0型]を用いているものと、「マ」にアクセント核がある[-2型]を用いているものとに分かれ、主流は法則通りの前者であった。後者は、発話者が起伏型形容詞のアクセント型につられて平板型形容詞の発話にも同じアクセント型を運用していると思われるが、この現象は、東京語の形容詞アクセントで平板型形容詞と起伏型形容詞の区別がなくなりつつある現象(井上1997)の表れであると言える。起伏型(頭高型)形容詞「イイ」の連用形「ヨク-」は、アクセントの法則によると、[1型]である。音声資料を見ると、全ての調査協力者の発話に共通して法則通り[1型]が用いられている。起伏型(中高型)形容詞「オモシロイ」の連用形「オモシロク-」は、アクセントの法則によると、[-2型]か[-3型]である。アクセント辞典においても、既にそのゆれが認められているが、本実験でも、この2つのアクセント型の間でゆれが見られた。(表4.1 参照)

4.1.2 「同意求め」

「同意求め」の発話についても、同じく「形容詞+ナイ」のアクセントを2単位と考え、語幹部分と「ナイ」の部分に分けて論述する。

「否定表明」の発話では「ナイ」のアクセントが全て「ナ」にアクセント核のある[1型]であったのに対し、「同意求め」の発話においては、「ナイ」が3発話(JP06-2(2)・JP05(2)・JP02(4))を除いて全て[0型]であるという、「否定表明」と「同意求め」とで傾向が二分する結果となった。ただイントネーションパターンは一樣ではないので、この点

については4.2.2を参照されたい。

次に、語幹部分のアクセントパターンを、各表現について見ていく。「アマクナイ」の語幹「アマク-」は、アクセントの法則によると[0型]であるが、音声資料の発話も語幹が[0型]のものが主流であった。ただし、文末で大きく下降上昇するイントネーションを伴う発話に、「マ」にアクセント核がある[-2型]の発話も1例見られた。(JPF02(2))

「ヨクナイ」の語幹「ヨク-」は、アクセントの法則によると[1型]であるが、1)語幹が法則通り[1型]で「ナイ」も元来のアクセント型通り[1型]のもの、2)語幹のアクセントは法則通り[1型]だが、「ナイ」のアクセント核が消滅し[0型]となったもの、3)語幹及び「ナイ」のアクセント核が共に消滅し、いずれも[0型]となったものの3パターンが観察された。

「オモシロクナイ」の語幹「オモシロク-」は、アクセントの法則によると、[-2型]と[-3型]との間でゆれが認められているが、音声資料でも、「否定表明」の場合と同じく語幹アクセントにはこのゆれが確認された。これは、個人の中でもゆれとして観察された。例えば、JPM02の場合、「否定表明」では語幹のアクセント型に[-2型]及び[-1型]を用いているが、「同意求め」では[-3型]を用いているなど、個人内でも表現意図が変わるとアクセント核の位置が変わってくるという現象が見られた。

語幹アクセントが法則通り保たれ、「ナイ」のアクセントも元来の型通り[1型]のものはJPM05だけで、その他の発話においては全て「ナイ」のアクセント核が消滅している。これに伴い語幹アクセントのアクセント核も消滅しているものと、語幹部分のアクセントは保持されたままのものとが見られた。(表4.2参照)

表4.1 「否定表明」アクセント型

対象発話 調査協力者	(1) アマクナイ		(3) ヨクナイ		(5) オモシロクナイ	
	語幹	ナイ	語幹	ナイ	語幹	ナイ
JPM01	[-2型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPM02	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM03	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM04	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]*
JPM05	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM06	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM07	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM08	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPF01	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF02	[-2型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF03	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF04	[-2型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF05	[-2型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF06	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPF07	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[1型]
JPF08	[0型]	[1型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]

注) *は、「ナイ」の後、文末に終助詞がついた発話。⁹

表4.2 「同意求め」アクセント型

対象発話 調査協力者	(2) アマクナイ		(4) ヨクナイ		(6) オモシロクナイ	
	語幹	ナイ	語幹	ナイ	語幹	ナイ
JPM01	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPM02	[0型]	[0型]	[1型]	[1型]	[-2型]	[0型]
JPM03	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPM04	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPM05	[0型]	[0型]	[1型]	[1型]	[-3型]	[1型]
JPM06-1*	[0型]	[0型]	[0型]	[1型]	[0型]	[0型]
JPM06-2*	[0型]	[1型]			[-3型]	[0型]
JPM07	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPM08	[0型]	[0型]	[1型]	[0型]	[-2型]	[0型]
JPF01	[-2型]	[0型]	[1型]	[0型]	[-3型]	[0型]
JPF02	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF03	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF04	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF05	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF06	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF07	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]
JPF08	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]	[0型]

注) *は、JPM06が2パタンの発話をしたことによる。

4.2 イントネーション

4.2.1 「否定表明」

「否定表明」では、各言語形式が持つ基本的なピッチパターンを変化させるほどのイントネーションは被せられていないが、全体的にへの字型に下降していくピッチパターンがほとんどの発話において見られた。「形容詞+ナイ」を2単位のアクセントと捉えると、大部分の発話において語幹の部分のアクセント核以降、「ナイ」のアクセントが弱まっており、「日本語の発話文において、フォーカスが置かれた部分以降はアクセントによるピッチの高低が弱まる」という郡（1997）の指摘を検証する結果となった。

しかし、「アマクナイ」の発話においては、「ナイ」におけるアクセントの弱まりが見られない発話もいくつかある。（図 6.3JPM01(1)・JPF02(1)・JPF04(1)・JPF06(1)）これは、郡（1997）が指摘するフォーカスの機能から言えば「ナイ」にフォーカスが置かれているということになる。これは、「アマクナイ」の「否定表明」表現が、プラスの評価を下している（「アマクナイからおいしい」）点と関係があると思われる。ここではプラス評価の内容を主張するので、「ナイ」にフォーカスを置いてそれを強調しても、マイナス評価を強調して主張する時ほど聞き手にきつい印象は与えない。逆に、マイナス評価を主張する「ヨクナイ」・「オモシロクナイ」の「否定表明」表現においてはイントネーションにより「ナイ」のアクセントを押さえ、相手にきつく聞こえることを防いでいると言えるだろう。

4.2.2 「同意求め」

「同意求め」の場合は、相手に問いかける疑問文として働くため、疑問文の上昇イントネーションが被せられることになる。これは、調査協力者全ての発話において確認された。しかし、同じ上昇調でも、先項で触れたアクセントがどのようなパターンをとっているか、また「ナイ」がどのようなイントネーションパターンをとっているかによって、全体のピッチパターンに大きな影響を与えていることが分かった。

ここで、先行研究における日本語疑問文の文末イントネーションのパターンについて再度確認しておく、日本語疑問文に特徴的な文末イントネーションは、「最終拍一拍で1オクターブに近い上昇をする形」（鮎沢1992）であった。しかし、本実験の結果、否定疑問文である「同意求め」の場合でも、1オクターブ相当の上昇が見られない発話が大部分であることが分かった。以下、各イントネーションパターンについてそれぞれの特徴を見ていくことにする。

まず、「同意求め」のイントネーションパターンとして主流であったのは、語幹のアクセント核も「ナイ」のアクセント核も消滅し、発話開始から文末まで平らに上昇していくイントネーションパターンである。上昇の仕方や全体的なピッチの形状には個人差があったものの、基本的には、文頭で少し立ち上がり、その後しばらく平らに続き、文末「ナ」から「イ」にかけて上昇するパターンである。上昇が極めて平坦なものが多く、極端な例としては文末のピッチが下降も上昇もせず、文末まで平らに保たれた状態で終了している発話（図 6.4JPF08(2)・図 6.6JPF01(1)）も見られる。「アマクナイ」を始めとする「平板型形容詞+ナイ」の場合は、元々の語幹アクセントが[0型]なので、語幹アクセントの「破壊」が顕在化しない（田中1993）が、一方では、他の起伏型アクセントが[0型]のパターンに近づき、アクセントパターンが同化してきている現象だという見方もできよう。この上昇パタ

ンは、若者を中心として急速に普及している「同意求め」特有の新型イントネーションパターンであり、田中（1993）にもその報告¹⁰がある。

第二のパターンは、語幹のアクセントは保たれたまま「ナイ」のアクセント核が消えて上昇イントネーションが被さっているパターンである。このパターンは、語幹部分のアクセントの下降から文末に向けてなだらかに下降し、文末「ナイ」の中で上昇する形である。この場合の文末上昇も、「1 オクターブに近い」上昇と言えるものは少ないが、共通して言えることは、文末で、「ナイ」の「ナ」開始点か、またはそれ以上まで上昇しているという点である。

第三のパターンは、「ナイ」のアクセント核が保たれたまま、上昇イントネーションがかぶさっているパターンである。このパターンでは、「ナ」から「イ」にかけてアクセントの高低差によりピッチの下降が見られ、その後文末で上昇するため、鮎沢（1992）で日本語疑問文の典型的ピッチパターンとされる「最終拍1拍で上昇する形」に該当すると言えるが、このパターンの発話（図 6.4JPM05(2)・図 6.6JPM02(4)・JPM05(4)・図 6.8JPM05(6)）を見ると、鮎沢（1992）で特徴的だとされる上昇ほど上昇していない。中でも比較的上昇が大きいJPM02(4)でも、1 オクターブ近い上昇にはなっていない。ただ、上昇前の下降開始点とはほぼ同等の高さまでの上昇を見せているという点では上に述べた平坦上昇のパターンとは異なる。この第三のイントネーションパターンは、「同意求め」を表現意図として設定した今回の実験では出てくる数が非常に少なかった。（上記4発話のみ）今回は対象外としたが、おそらくこのイントネーションパターンは、「否定質問」や「反問」などの表現意図で主に使用されると考えられるパターンである。同じ疑問表現の中でも、「同意求め」・「否定質問」・「反問」といった他の表現意図が音声的にどのように実現されるのかについては、今後の研究課題である。

4.3 持続時間

次に、持続時間の側面から分析および考察を行う。

まず、発話全体の持続時間（資料3）を見ると、表現意図に限らず全般的に、女性の方が男性よりも持続時間が長い傾向にあることが分かる。

「否定表明」と「同意求め」とを比較すると、「アマクナイ」においては、「同意求め」のほうが発話全体の持続時間が長く、「ヨクナイ」・「オモシロクナイ」においては、「否定表明」のほうが、若干長いという傾向は見られたが、それほど顕著な時間差は見られず、持続時間が上記2つの表現意図の区別においては、主要素とはなっていないことが分かった。

ただ、上記の傾向について、「ヨクナイ」・「オモシロクナイ」の両発話においては実験前の仮説とは逆の結果が出たことになる。この結果を招いた要因としては、本研究で扱う表現意図の範囲を超えるが、聞き手との人間関係や、相手に対する配慮などの問題等¹¹が考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、「い形容詞+ナイ」の発話における「否定表明」・「同意求め」の両表現意図の音

声的実現について、20代母語話者の音声資料を基に、アクセント・イントネーション・持続時間の各側面から記述した。以下に「否定表明」・「同意求め」の韻律的特徴として観察された傾向をまとめる。

アクセントに関する相違点は、「否定表明」の発話には基本のアクセントパターンが用いられ、「同意求め」の発話においては基本のアクセント型に変化が生じる場合が多い点である。この変化の要因としては、問いかけの上昇イントネーションが被さることが一因として挙げられよう。特に両者の違いを特徴づけているのは「ナイ」のアクセント核の有無である。「否定表明」の発話では「ナイ」のアクセント核が保たれたままだが、「同意求め」の発話においてはアクセント核がなくなる。それに伴い、語幹アクセントの核もなくなっている発話が数多く観察された。その他、表現意図によって語幹部分のアクセントに変化がつけられている現象も観察された。

イントネーションの観点から見た「否定表明」と「同意求め」の相違点は、文末で前者は下降、後者は上昇するという点である。「否定表明」においては、文末に向けて次第に下降するイントネーションが被さることにより「ナイ」のアクセント核が弱まる現象が主流として見られた。「同意求め」においては、上昇といっても、疑問文に典型とされる1オクターブ相当の上昇が見られない発話が多いことが分かった。主流を占めたものは新型の平坦な上昇パターンであり、田中（1993）が指摘した文末で「とびはねて」いる現象よりも、むしろ平坦な上昇イントネーションが語のアクセント核をも破壊し、平らに被さるという特徴が顕著に見られた。日本語ではイントネーションはアクセントを壊さず被さるものであると言われているにも拘わらず、このイントネーションが「ナイ」および語幹のアクセントを破壊して平らに上昇していくという点は注目すべき新現象であると言える。また田中（1993）では、このパターンに女性のイメージが強いという傾向を意識調査の結果として報告しているが、少なくとも今回の調査協力者が属する20代の層において、男女の差なく使用されている実態が伺える結果となった。日本語音声教育の観点から以上の結果を見ると、教育の現場で日本語教師が「分かりやすく」という理由で過剰な上昇イントネーションを用いて発話している場合、学習者が教室で接するイントネーションと実際の生活で使用されているイントネーションとの間に差が生じているという問題が伺える。

持続時間は、「否定表明」と「同意求め」との区別には、大きく関わっていないことが分かったが、持続時間は相手との関係や相手への配慮の意識等、語用的な要因が関わる場合に影響してくるのではないかという可能性が示唆された。

以上、20代母語話者の発話における韻律的特徴の傾向を明らかにした。今後は学習者の生成・知覚について母語話者と比較した研究を進め、学習者における問題の所在を明らかにし、日本語教育の現場で具体的にどのように支援できるかという点に考察を発展させていくことが課題である。

資料1 実験使用資料（紙面の都合上、一部を掲載する。）

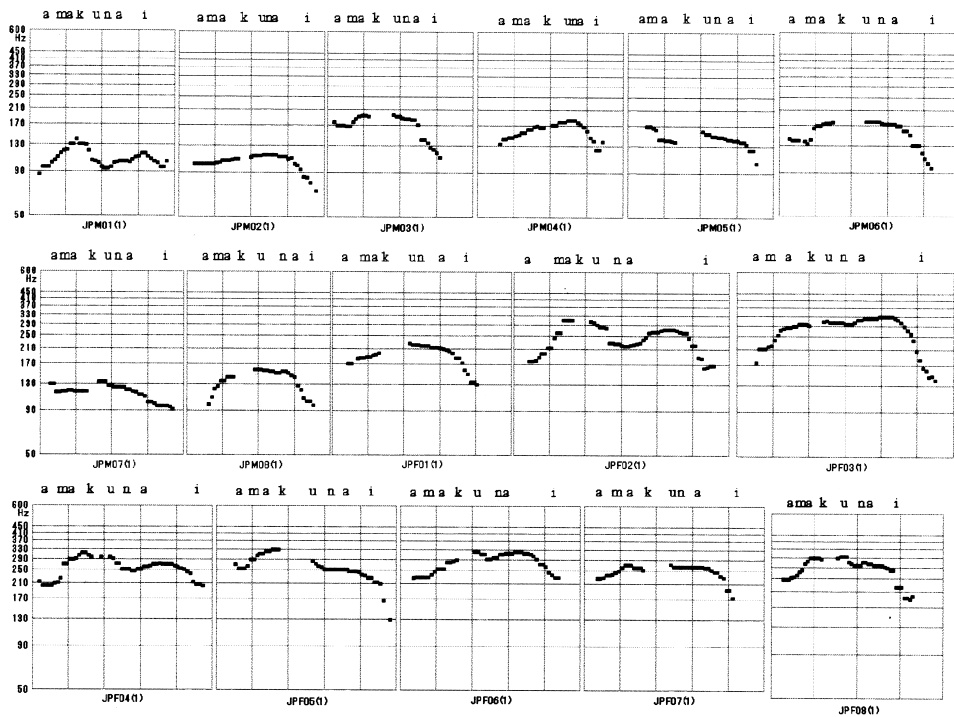


図 6.1 「オモシロクナイ・同意求め」



図 6.2 「オモシロクナイ・否定表明」

資料2 ピッチ曲線*



*横軸：ミリセカンド (msec.)・一目盛り 150 (msec.)

図 6.3 「アマクナイ・否定表明」

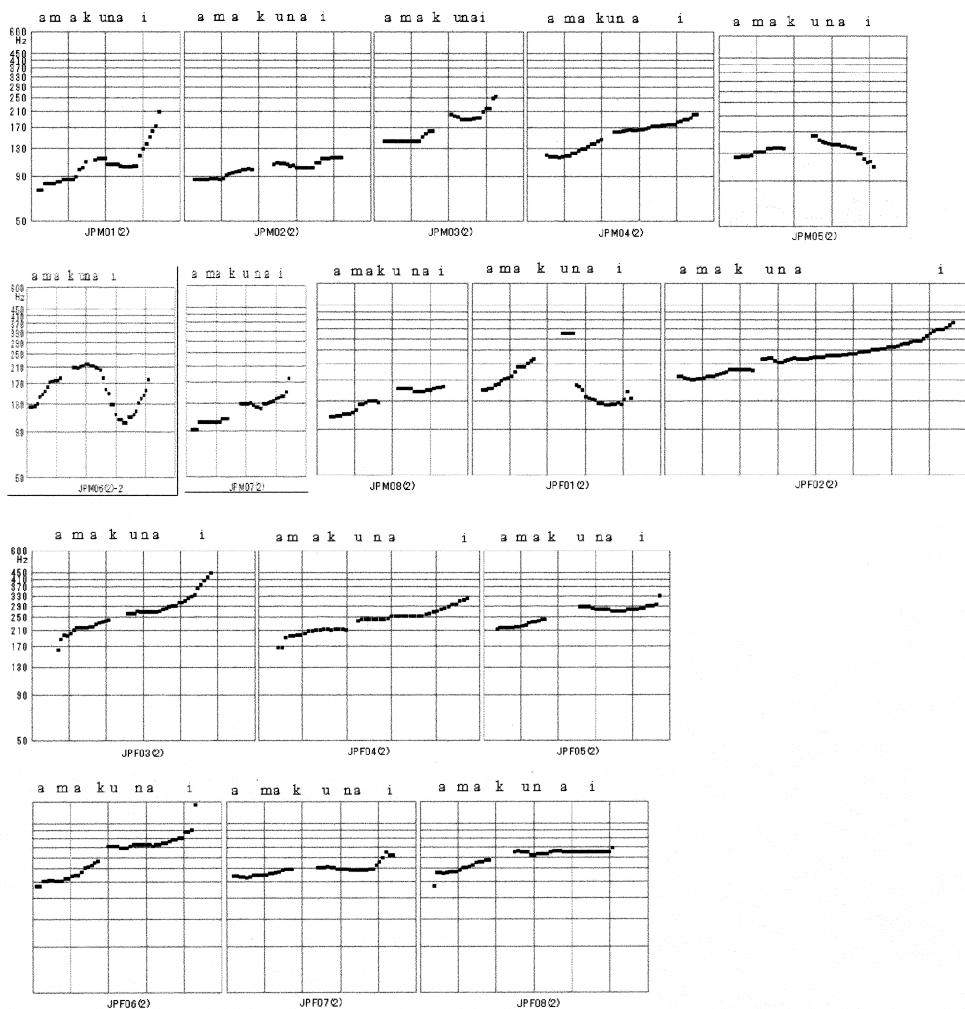
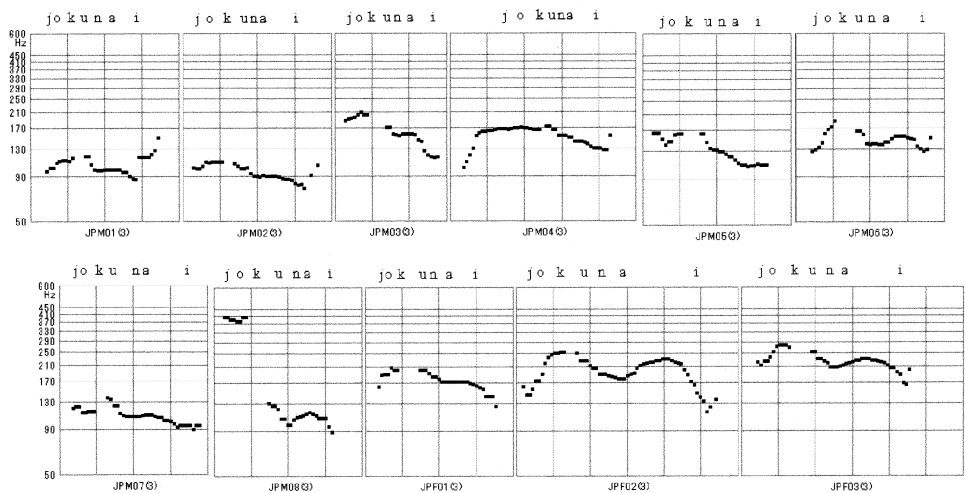


図 6.4 「アマクナイ・同意求め」



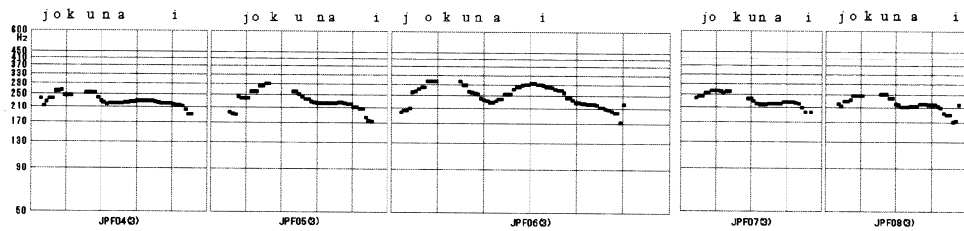


図 6.5 「ヨクナイ・否定表明」

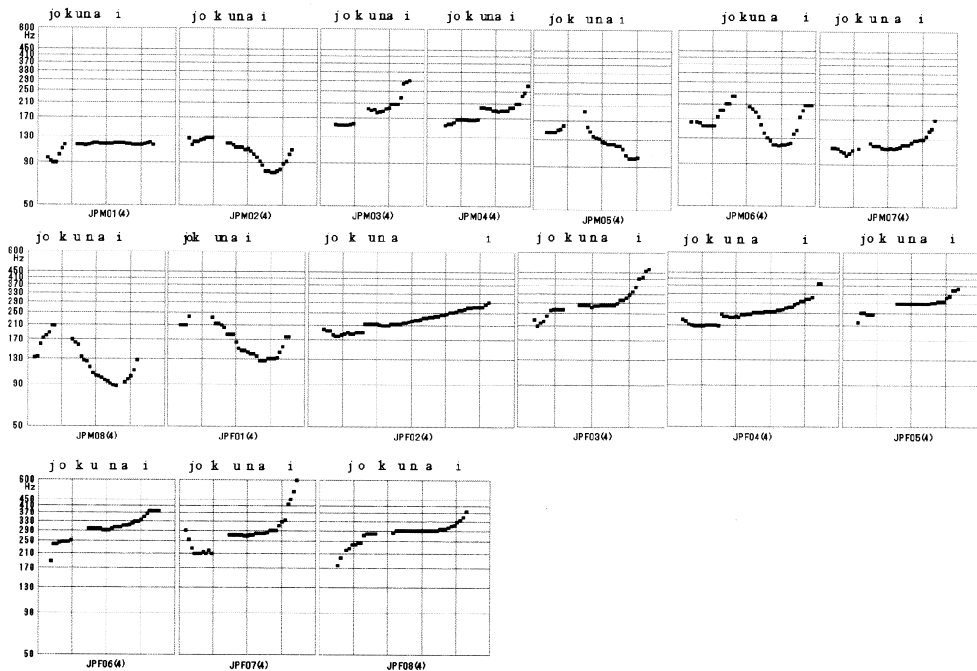
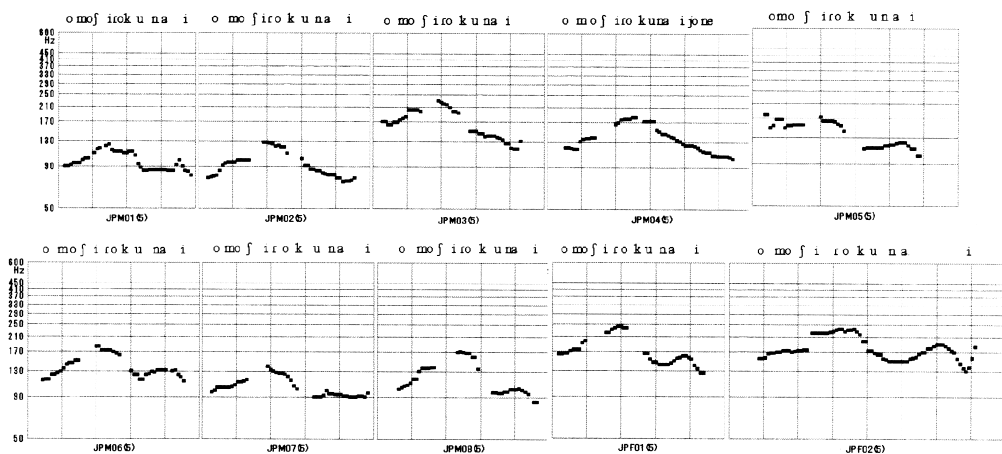


図 6.6 「ヨクナイ・同意求め」



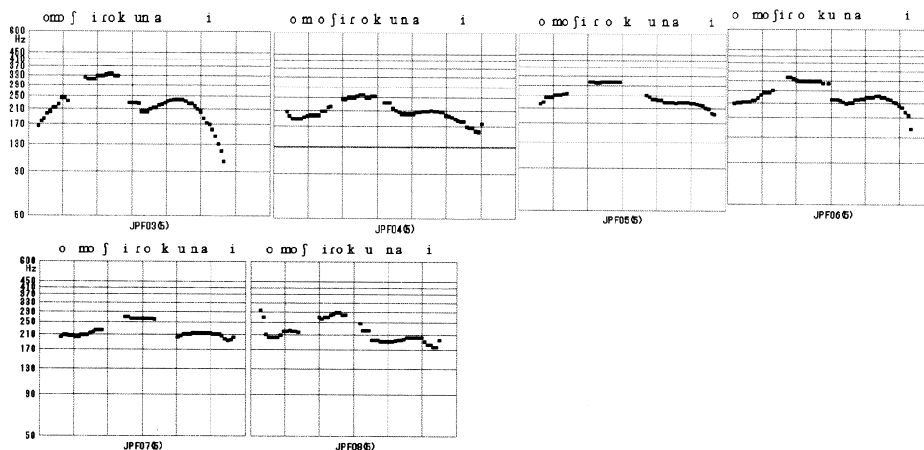


図 6.7 「オモシロクナイ・否定表明」

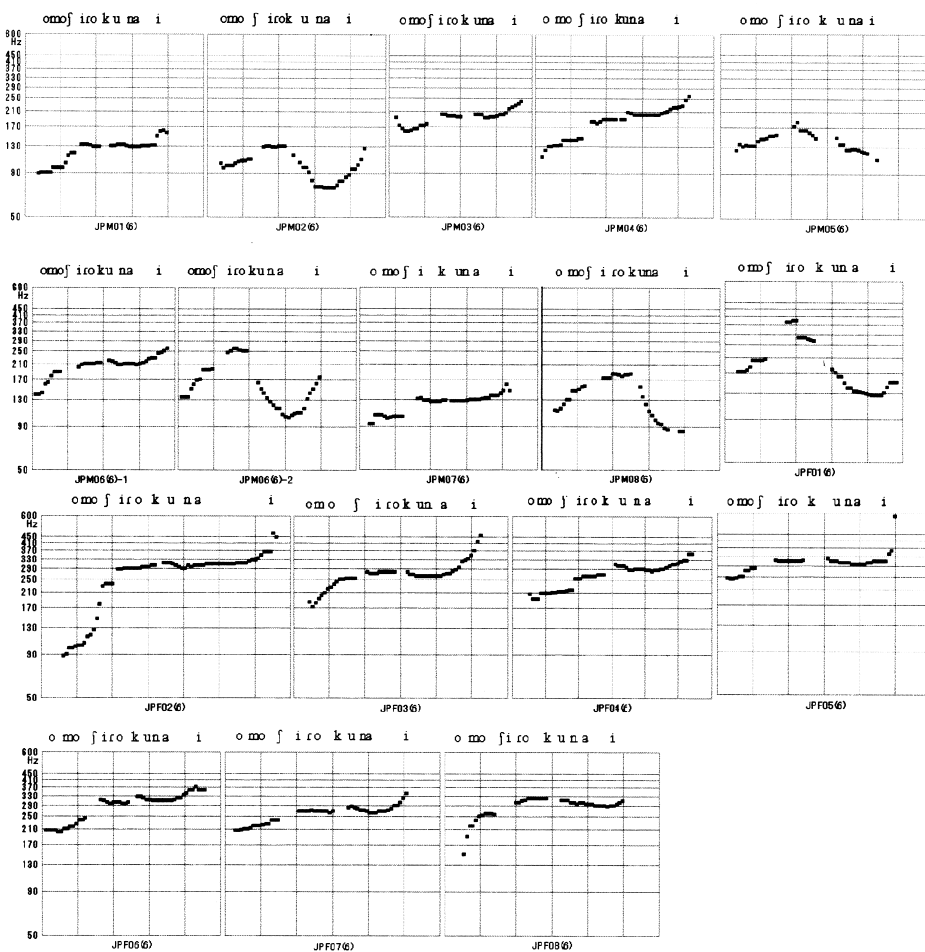


図 6.8 「オモシロクナイ・同意求め」

資料3 持続時間グラフ（紙面の都合上、平均値を示す。）

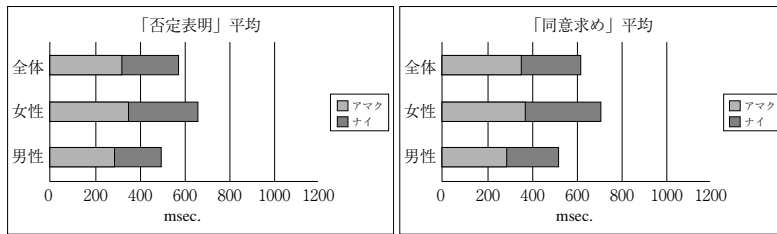


図 6.9 持続時間グラフ「アマクナイ」

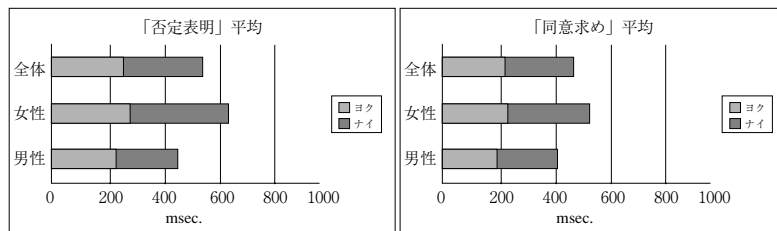


図 6.10 持続時間グラフ「ヨクナイ」

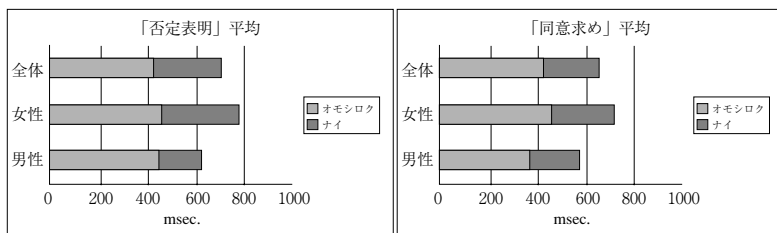


図 6.11 持続時間グラフ「オモシロクナイ」

(注)

- 1 「東京語」は、ここでは「首都圏で話される共通語」という意味で用いる。また、本実験における東京語話者の規定は、少なくとも幼少期から義務教育終了までを東京地区で過ごし、現在も東京語を用いて生活する者とし、両親のどちらかが他地区出身で方言を用いている者は除外した。また、長期に渡って東京で生活している者についても、生育地が他地域の場合は、方言の影響が残っている可能性があることが予備調査においても問題となったため、除外した。この点については、フェイスシートへの記入により確認を行い、調査協力者に他地域の方言による影響がないことを確認した。また、結果に性差による影響が出る可能性も考慮の上、男女が同数となるよう協力者を選出した。
- 2 録音の際、協力者に設定表現意図を正しく理解してもらうため、スクリプトには会話の場面および状況が一目で分かるように工夫をした絵を付加し、対象人物の脇にはその人物の「気持ち」という形で表現意図を雲形吹き出しの中に付記した。さらに、表現意図について十分な理解が得られたことを実験者が口頭のやり取りにより確認し、誤解が生じたまま資料の録音を行わないよう細心の注意を払った。
- 3 SONY Digital Audio Tape Corder TCD-D100、SONY コンデンサーマイク ECM-MS957を使用した。

- 4 SUGI Speech Analyzer (株式会社アニモ)を使用した。
- 5 アクセントの法則として、NHK日本語発音アクセント辞典(2002)に掲載のものを参考とした。今回の研究に関わる、連用形(「〇〇ク」の形)のアクセントは、平板型形容詞の場合、語幹部分は平板型、起伏型形容詞に関しては、頭高および3拍までの中高型のものは頭高型に、4拍以上の中高型のものは後から3拍目または後から2拍目までが高いパターンである。4拍以上の起伏型形容詞には、連用形のアクセントパターンにゆれがあるということになる。
- 6 基本周波数(F0)が倍になることを、1オクターブの上昇と呼ぶ。
- 7 鮎沢の「問い返し疑問文」と同義である。
- 8 持続時間の計測基準については、紙面の都合上詳しい説明は省略するが、波形が周期的に記録されている部分を母音の開始点および終了点として計測した。また、「ナイ」の開始点は、直前の母音/u/の終了点が波形およびスペクトログラム上でははっきりしているので、ここでは母音/u/の終了点を「ナ」の子音/n/との境界とし、その時点を/n/の開始点と規定して計測を行った。
- 9 「ナイ」に終助詞「ヨネ」がついた発話である。実験中「どうしても終助詞をつけないと発話しにくい」とのコメントがあったため、違和感を持ちながら発話したものを資料として用いるより、本人が自然であるとする発話を資料として残すことを優先し、無理に「ナイ」で終わる発話を強制することはしなかった。
- 10 イントネーションパターンとして文末でとびはねているような特徴がみられるため、「とびはねイントネーション」と名付けている。
- 11 発話が伝える内容がプラスイメージかマイナスイメージか、つまり語幹部分の形容詞が「好ましい」ことを表しているか否かが要因として予想される。この2つの対象発話においても、プラスイメージの内容を伝える時よりも、マイナスイメージの内容を伝える時の方が発話時間が相対的に長くなる傾向にあるということが言える。すなわち、マイナスイメージの内容を伝えるときには、それが「否定表明」であっても「同意求め」であっても、発話全体の持続時間が長くなる傾向にあることが分かった。

参考文献

- 鮎澤孝子(1990)「意味のあいまいさとイントネーション・ポーズ」『講座日本語と日本語教育3 日本語の音声・音韻(下)』明治書院、113-138
- (1991)「イントネーションと日本語教育」『日本語学』第10巻 第7号 明治書院、98-113
- (1992)「日本語の疑問文の韻律的特徴」『日本語の韻律に見られる母語の干渉(2)―音響音声学的対象研究―』文部省重点領域研究『日本語音声における韻律的特長の実態とその教育に関する総合的研究』研究代表者：杉藤美代子(以下「日本語音声」)D1班平成2年度研究成果報告書、1-20
- (1993a)「問い返し疑問文のイントネーション：韻律教育へのヒント」『D1班研究発表論集』文部省重点領域研究「日本語音声」D1班平成4年度研究成果報告書、124-132
- (1993b)「日本語学習者のイントネーション―日本語疑問文のイントネーションの習得」『D1班研究発表論集』文部省重点領域研究「日本語音声」D1班平成4年度研究成果報告書、133-134
- (1993c)「外国人学習者による日本語の質問文イントネーションの習得過程」『日本語音声と日本語教育―外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究―』文部省重点領域研究D1班平成4年度研究成果報告書、161-186
- 井上史雄(1997)「イントネーションの社会性」『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂、143-168
- NHK放送文化研究所(2002)『NHK日本語発音アクセント辞典新版』
- 郡 史郎(1997)「日本語のイントネーション―型と機能―」『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂、169-202
- 田中ゆかり(1993)「「とびはねイントネーション」の使用とイメージ」日本方言研究会第56回発表

原稿集

- 谷口聡人 (1993) 「韓国語を母語とする学習者の韻律的傾向について」『D1 班研究発表論集—外国人を対象とする日本語教育における音声教育の方策に関する研究—』平成4年度研究成果報告書、135-137
- 福岡昌子 (1998) 「イントネーションから表現意図を識別する能力の習得研究—中国4方言話者を対象に自然・合成音声を使って—」『日本語教育』96号、37-48.
- (1999) 『中国人学習者の日本語音声の習得及びその指導に関する研究—破裂音とイントネーションを中心として—』お茶の水女子大学大学院 人間科学研究科 博士論文
- 森山卓郎 (1989) 「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育 1』明治書院、172-196
- ラディフォギッド P. (1976) 『音響音声学入門』佐久間章訳 大修館書店
- (1999) 『音声学概説』竹林滋・牧野武彦共訳 大修館書店